

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：32412

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02181

研究課題名(和文) 関係の倫理学の再構築—倫理学・倫理思想史と人文知の架橋をもとめて—

研究課題名(英文) Reconstruction of 'ethics of human relations -build the bridge between ethics and humanities

研究代表者

清水 正之 (SHIMIZU, MASAYUKI)

聖学院大学・人文学部・特任教授

研究者番号：60162715

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：近代日本の倫理学史・倫理思想史には、自他の関係という主題が存在する。本研究は、その主題を「関係の倫理学」という視点から再考するものである。「関係の倫理学」は和辻哲郎の倫理学がその思索の1つの典型であるが、他方、この主題は、和辻の体系に留まらず、直接和辻の影響にあるものをこえ、文学、キリスト教思想、あるいは社会学、精神科学までに及ぶ。本研究は、共通の問題圏が及ぶ隣接諸科学にまで視野を広げ、そこに流れる「人文知」をその深部からくみ取り、その成果をあらためて倫理学の考察に還流させ、近代日本の倫理学的営為の意味を再検討した。今次の研究において、倫理学の再構築の手掛かりを一定程度えることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近代日本の倫理学の「関係をめぐる倫理思想」「間柄の倫理学」は、倫理学という一領域、あるいは和辻哲郎の倫理学体系に限定されない人間に関する思索である。人文学の有効性が疑問視されるという傾向の存する中、この主題を、単に人文科学の一領域の問題とするのではなく、倫理学から哲学、さらには、宗教思想、社会学、精神科学へと共通する問題圏として検討し、そこに流れる「人文知」さらには「人間知」として検討することは、その視野をひろげ、現代に生きる人間にとっての視点として、極めて重要な意味をもつし、それを公開し、具体的な成果としてしめすことは、学術的意義のみでなく、広く社会的な意味をもつものとなる。

研究成果の概要(英文)：In the history of ethics and ethical thought in modern Japan, there is a theme of relationship between men. This study aims to rethink in its subject from the perspective of the ethics of "betweenness"(間柄). The ethics of "betweenness" is a term used by Tetsuro Watsuji (和辻哲郎), and but this subject is not limited to Watsuji's system, goes beyond what is directly influenced by him, and extends to literature, Christian thought, and sociology and spiritual science. This research has broadened its horizons to adjacent sciences with common subject. And I aimed to draw out the humanistic knowledge flowing there from its depth. I reconsidered the meaning of modern Japan's ethical activities by returning the results to ethical considerations. I was able to obtain a certain amount of clues for the reconstruction of ethics.

研究分野：倫理学・日本倫理思想史

キーワード：倫理学 日本倫理思想史 和辻哲郎 間柄の倫理 関係 人文学 キリスト教

1. 研究開始当初の背景

申請者は倫理学・日本倫理思想史の研究に従事してきた。その観点から本研究を意図した背景について以下に述べる。

(1) 問柄の倫理学から関係の倫理学へ：申請者は研究の過程で、和辻哲郎をはじめ近代の倫理学の歩みを注視しつつ、つねに伝統的な精神史を視野に入れる研究を行ってきた(『日本思想全史』2014ほか)。その中で自他の「関係」の倫理学の領域への関心を持続させてきた。近代日本の倫理学の領域に、「関係の倫理学」というべき領域がたしかにある。その中核をなすのは和辻哲郎の問柄の倫理学であろう。和辻は個人主義を論理的虚妄として退けるが、私秘的で閉じた二人共同体を起点に、関係の外的のひろがりのなかで、親族・民族・国家さらには国際関係にまで論じ及んでいる(『倫理学』)。その論理構成において、西欧の哲学・倫理学のみならず文化人類学等の隣接領域の成果をも組み込みながら広範な議論を展開している。しかし、その基底にあるものは関係をめぐる日常的心性ともいうべきものの解釈学的抽出であったともいえる。他方で、人倫的展開の基底を「空が空する」運動とみるなど、日常性と超越性の連関にも踏み込んでいる。従来の研究では、和辻の問柄の倫理学は、擁護されあるいは批判の対象とされる場合でも孤立した単独の体系として受け止められることが多かった。本研究は大正期から昭和前期の他の倫理学的思索との対比・異同を考えることで、関係の倫理学という領域の広がり、倫理学固有の問題として再検討し再構築する必要性を感じてきた。

(2) 問柄の倫理学の相対化：和辻の問柄の倫理学自体に両面性がある。一方は、閉じた共同体としての我・汝関係というきわめて私秘的なそれであり、他方、その人倫的展開である家族、親族、部族・民族、国家、そして世界である。両者は密接に関わっているが、批判、擁護ともに両者を密接なものともみえる研究は少ない。とくに前者の我・汝関係については、西田幾多郎の『善の研究』以来の自己と世界の捉え方が関わっているだろうし、また波多野精一の『宗教哲学』の中での、「我・汝」関係、「我・もの」関係の把握との対比・異同の研究の必要性が導き出される。それには和辻も常に意識しているキリスト教の理解が関わっている。波多野は、神との関係に終始する様にみえる日本のキリスト教思想史のなかでは、自己と他者という問題に関心を向けている数少ない一人である。和辻の最終講義で波多野に向けた言葉とされる「これより先は波多野君にきいてほしい」という言葉は、和辻の倫理学の、此岸性に局限する姿勢と超越性への禁欲を意味するとされてきたが、和辻を波多野との関係の中であらためて、考察する道が展望できるのではないかと考えてきた。また後者の人倫的展開として描かれる関係の倫理学については、田邊元の社会的存在論との連関から、マルクス主義への対応が問われることとなるとも考えてきた。

和辻倫理学の相対化と人文知への広がり探求：本研究の目的には、倫理学と他の人文知の関係に視野を広げることもその一つとなる。関係の倫理学という領域は、日常的な基礎経験の洞察と密接に関係していることはいままでのない。そもそも和辻が解釈学的方法をとること、倫理学とともに、その体系と密接に関わるものとして、倫理思想史の必要性を繰り返し主張し、その領域での多くの著作を発表していることにも関わっている。

同時代の土田杏村や三枝博音の哲学にもまた、和辻の構想とは異なる結構をもつ広義の関係をめぐる倫理学が含まれる。二人に共通するのは、哲学倫理学を日本の思想文化の伝統と連関づけようとする試みであった。その試みは、倫理思想史的・精神史的な広がりを持ち、文学宗教思想の隣接領域に密接に関わっている。関係をめぐる言説は、他方で日常の倫理学ともいうべきものであり、その倫理学の部門はまた人文知のあり方にも密接に関わっている。彼らの関係の倫理学の領域での位置づけも本研究の重要な目的となると考えた。

戦後の「関係の倫理思想史」：戦後の関係をめぐる倫理学的知・人文知には、和辻の提起した問題が継承されている。森有正の『経験と思想』、そこに展開された「第三人称の確立」の主張には、和辻倫理学の批判的受容の後が濃くうかがわれ、土居健朗の「甘えの構造」、木村敏の「人と人との間」さらには社会学領域の「間人主義」(濱口恵俊)もまた、その一つである。これらの人文知を文化論として終わらせず、倫理学的考察と関わらせ還流させることも副次的な目的となると考えてきた。

伝統的倫理思想と近代の「関係の倫理学」との連関の解明：和辻は倫理学と倫理思想史が不可分で密接の関係にあるとみる。倫理思想史的考察は本研究の目的の一部をなす。それは、関係の倫理学の基底をなす基礎経験、心的習慣性についての知見をもたらし関係の倫理学の再構築に意味をもってくる。「人と人との間」(富士谷御杖)という問題関心が、生じたのも、人間の関係が仁義礼智によって把握されることが主流となっていた近世の儒教思想に対して、その人間観に反対する国学思想からであった。近世の国学はまた仏教的人間理解にも批判を向けた。同時に、本居宣長は富士谷御杖には、仏教特に浄土教の影響がうかがわれる。そうであれば、それらの考察は、和辻、西田、波多野、田邊等の近代の関係の倫理学における儒教、仏教、神道さらにはキリスト教思想の連関について新たな知見を与える可能性があると考えに至った。副題は、そうした知の連関、歴史的連関の双方を視野に入れながら、近代日本の関係をめぐる倫

理学、倫理思想史の視点と連関させてその全体を明らかにしておきたいと考えたからである。
以上が本研究に至る当初の背景である。

2. 研究の目的

研究の目的は、上記研究当初の背景と重なる部分が多いが、以下に記すとおりである。

近代日本の倫理学史のなかにある自他の関係、自己と共同性に関わる「関係の倫理学」というべき問題圏を扱った倫理学を再考し、得られた基礎的知見をもってその再構築の手がかりとする。その過程で、中核的な位置にある和辻倫理学の「間柄の倫理学」を対照軸として、その体系性に完結させての理解にとどまらず、倫理思想史的な考察もくわえて相対化することで、和辻の影響を受け形成された倫理思想、他領域に及ぶ人文知をあわせて再考し、その成果をあらためて倫理的考察に還元させて、近代日本の倫理学的営為の意味を再検討し再構築することを研究の目的とする。

関係をめぐる倫理学という日本の近代の哲学的営為を総覧した研究はほとんどないなかで本研究は一定の意味がある。また倫理思想史的に追求することで、人文知の全体に関わる効果を期待できる。関係・間柄の言説は、エスノセントリズムになりかねないものをふくむ。しかしながらこの研究は、特殊性を強調するものではない。和辻の言い方によれば「事柄そのもの」(『日本語と哲学の問題』)を追求する方法と実質を、あらためて倫理学領域で探ってみることに意味があるだろうと考えた。今や国際的な視野の下におかれている日本倫理学、哲学史研究に一定の新たな知見を開くことも目的となる。

3. 研究の方法

近代日本の「関係の倫理学」に関わる領域を和辻哲郎の「間柄の倫理学」を参照の軸にしつつ、その広がりや、未だ解明されていない隠された影響関係を明らかにし、あわせて倫理思想史の領域にまで考察をひろげ、「関係の倫理学」の倫理思想史的かつ内在的考察を深める。和辻の間柄の倫理学について、私秘的な自他関係の把握、及び、社会的関係の把握の両面のそれぞれが、他の主要な倫理学体系と、どのような交響的ないし否定的な影響関係、受容関係を形成しているかを考察すると共に、最終的には、「関係の倫理学」を再構築することを、計画の最終目標として、遂行していくこととした。以下、研究の方法を経時的に記す。

(1) 初年度

初年度は、関係の倫理学の哲学史的・総覧的視点を明確にするよう務めた。これまで行ってきた研究をあらためて「関係の倫理学」という視点から総合し、そのうえに新たな展開をめざした。和辻の間柄の倫理学のうち、「人間の学」としての倫理学の体系とその展開をあらためて精査し、まずは論理構造をあきらかにしたとともに、西洋思想を含めた受容・影響関係をあきらかにする。西洋思想を哲学倫理学のみならず、和辻倫理学の参照するレヴィ・ストロース等文化人類学、キリスト教学等の領域にも目を向け、その受容や影響関係を具体的に考察すると共に、その点からの日本近代の他の倫理学体系との連関をあきらかにした。西田の体系を関係の倫理学という視点から再検討し、特に『私と汝』等中期までの思索のなかで自他および自己と共同性との連関を論じた部分を、和辻との対照において整理した。波多野精一の自他論をその宗教哲学(『宗教哲学』等)のなかにあらためて位置づけ、和辻倫理学の此岸性との関係を、とりわけキリスト教理解に関わらせてあきらかにした。とくにカントを受けての人格概念ほか、倫理学上の概念を本研究主題のもとで、再検討することも重要となるキリスト教理解の問題では、西田幾多郎のキリスト教神秘思想との思想的受容も連関しての考察対象とした。また社会的存在論としての田邊元の体系(「種の論理」)を関係の倫理学の視点から再検討し和辻倫理学の人倫性の展開の論理との関係を考察した。以上からえられる知見の中間的発表を、9月開催の日本哲学会の日中交流のシンポジウムにてのキーノートにおいて発表し批判をあおいだ。

(2) 2年度

あらためて、和辻の間柄の倫理学を参照の軸としながら、考察をすすめた。かつて考察した土田杏村と三枝博音の自他の共同性の議論は、和辻の個人主義的否定の上に築かれた関係の倫理学とは、その発想・結構をおおいに異にしているが、本研究主題のもとで、一層精緻に検討した。その際、三者の解釈学への態度がひとつの問題になった。解釈学と現象学の間をゆれながら、最終的には解釈学的立場に戻る和辻に対して、土田、三枝は、解釈学に深く関わりながら、その歴史的な負荷の重視を批判し、和辻的な問題構成と異なる関係をめぐる思索を展開していた。その方法論的な対応には、土田は大乗仏教とくに華嚴經の独特な解釈により、三枝の場合は神道の倫理思想および超越観の理解が大きく作用しているように見える。また近世の国学思想、とくに富士谷御杖を両者ともに評価するが、その背景に、仏教・神道の理解が大きく関わっているように見える点を明らかにした。

大正期は「生活」という視点が関係の倫理学に大きな関わりをもっている。また「人格」の概念など、関係の倫理学に関わる概念の、倫理思想史的観点からの考察も重要となる。関係の倫理学の考察を倫理思想にまで広げて、近代日本の人文知の中における関係の問題の、基礎経験をあきらかにした。

なおこの年度に、北京で開催された「世界哲学大会」に参加した。関係の倫理学がとくに影響をうけたドイツの諸思想について、研究開始時に予定していたベルリンやライプチヒ(ライプニッツの研究者(ライプチヒでは2016年9月研究代表者は「関係の倫理学と翻訳」というテーマでの発表を行った)との意見交換が実施できなかったかわりに、この大会にてドイツの研究者との意見交換や情報交換を行った。

研究成果を日本倫理学会および日本カトリック教育学会等で発表した。

(3)3年度および以降

2年間の研究成果のうえに、3年度以降は、さらに倫理思想史にひろげて、問題の深化をはかった。とくに和辻の間柄の倫理学は、戦後あらたなまなざしの元に検討した。戦後の、和辻の議論を受けて展開された一群の関係の倫理学、倫理思想の問題とその周辺をさぐった。森有正は『経験と思想』において、日本の関係性は二人称的言語への傾向をもち、三人称的命題が成り立たないという見解を表明しているが、他方で、和辻の二人共同体の議論、日本の間柄の議論を重要な「日本の経験」の表明として、それを批判的に土台としながら、自己の議論を展開している。他方で、森の議論は背景に、そのキリスト教思想を背景にしており、その議論に垣間見られる宗教的超越の問題は、波多野精一の議論に通じる面がある。これらの点を対比的に検討した。

おなじく土居健朗の『甘えの構造』、木村敏の『人と人との間』等もまた、和辻の間柄論をふまえながら、独自の見解を示している。これらの広義の倫理思想、人文知をこれまでの考察と結びつけ、つねに倫理学の展開に位置づけ、その知見を倫理学に還流させながら、近代日本の関係の倫理学の再構築を行った。

研究成果を関連学会でおこなうとともに、この主題での出版を計画する。

以上の方法に基づき、研究を遂行した。

4. 研究成果

研究は、一部文献調査を実施できない等、外的事情から遅延した部分があるが、オンライン学会等の手段が多様化し、着実に進めることができた。

本研究による研究成果、その国内外での位置付け、今後の展望などを以下に記述する。

本研究の「開始時の背景」や「目的」「方法」に記した方向と方法によって、研究は順調に進んだといえる。とくに研究初年度の2017年の「日中哲学フォーラム」での「思想史研究と「関係の倫理学」再考」という発表では、本研究の意図の核心部分を、日中を中心とする国内外の研究者に提示することで、単に日本にとどまらない問題の拡がりの中で事柄を考察する意味の大きな手掛かりをえられた。

「研究の方法」初年度の以下で記述した宗教哲学ないしキリスト教との関わりについては、図書(『生きる意味 キリスト教への問いかけ』等)や論文において早期に手掛け、公表することができた。その上で2年度以降、さらに考察を続け、雑誌論文(『明治期の道徳哲学とキリスト教』等)の公表につながった。とくに3年度は、倫理学会での「自然と人為」等で、方法の2年度、3年度に記した方法に基づき、課題全体に関わる問題提起ができた。

またその課題と問題意識を、3年度以降の研究の成果として、“The natural and the artificial: Concepts of nature in modern Japanese ethics”(倫理学会欧文誌)やあるいは、韓国長老神学大学校とのシンポジウムでの発表・論文(「北森嘉蔵「神の痛みの神学」の人間論的側面をめぐって」等)、臺灣大学でのシンポジウム発表(「日本思想史研究の成立と展開 人文科学と社会科学の間」)を通して、単に国内的な局面に限定されない国際的な場面向け、発信することができた。

図書掲載論文(『世界社会の宗教的コミュニケーション』2020年等)では、主題を西洋倫理学・西洋倫理思想史の流れと連関させる視点を論じることができた。

なお、この研究の間、和辻の倫理学がいわゆる伝統思想の摂取批判をふまえていることから、本研究課題のあり方にも関わることを意識してきたが、その点でも、石田梅岩に関する図書掲載論文、また勝小吉という関係の規範を超越したかに見える人物の思想等に触れる機会ができ、当初の問題と視野を広げることが可能となった。

今後さらに本研究課題を、新たに得た知見等をふまえ、「倫理学・倫理思想史と人文知の架橋」という喫緊の研究的課題として継続的に取り組んでいく具体的な手掛かりをうることができた。

以上が本研究の目的および方法に基づいて遂行された研究に関わる研究成果である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 3件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 清水正之	4. 巻 32号
2. 論文標題 高橋義文先生の思い出 - 「下からの」方法とお人柄	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本ビューリタニズム学会ニューズレター	6. 最初と最後の頁 3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水正之	4. 巻 9
2. 論文標題 北森嘉威「神の痛み」の神学」の人間論的側面をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日韓神学会議論集	6. 最初と最後の頁 7-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 SHIMIZU Masayuki	4. 巻 2
2. 論文標題 The natural and the artificial-concept of nature in modern Japanese ethics	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Special Issue of the Annals of Ethics 2019	6. 最初と最後の頁 15-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 清水正之	4. 巻 68
2. 論文標題 自然と人為—近代日本の倫理学における自然概念—	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 倫理学年報	6. 最初と最後の頁 43 - 53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 清水正之	4. 巻 7巻1号
2. 論文標題 明治の道徳哲学とキリスト教－西村茂樹『日本道徳論』をとおして	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 福音と聖書	6. 最初と最後の頁 30-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水正之	4. 巻 5
2. 論文標題 思想史研究と「関係の倫理学」再考	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『第五回日中哲学フォーラム 思索と対話による日中交流の深化 境界を架橋する哲学の役割』	6. 最初と最後の頁 57-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 清水正之	4. 巻 519号
2. 論文標題 見守ることの意味	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 キリスト教保育	6. 最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 清水正之
2. 発表標題 高橋義文先生の思い出 「下から」の方法とお人柄
3. 学会等名 聖学院大学総合研究所ラインホールド・ニーバー研究会および組織神学・伝道研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 清水正之
2. 発表標題 日本思想史研究の成立と展開 人文科学と社会科学の間
3. 学会等名 第七回全国研究生研習會「人文與社會科学對話的日本研究」臺灣大学（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 清水正之
2. 発表標題 北森嘉蔵「神の痛みの神学」の人間学的側面をめぐって
3. 学会等名 日韓神学者会議（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 清水正之
2. 発表標題 自然と人為－日本近代の諸相から－
3. 学会等名 日本倫理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 清水正之
2. 発表標題 キリスト教主義学校における建学の精神と多様化する社会 教育における宗教と道徳をめぐって
3. 学会等名 日本カトリック教育学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 清水正之
2. 発表標題 思想史研究と「関係の倫理学」再考
3. 学会等名 第五回日中哲学フォーラム（中国社会科学院哲学研究所・日本哲学会・立命館大学人文科学研究所共催、中華日本哲学会協賛）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 清水正之
2. 発表標題 年号と暦法－作為（人作）と自然（神作）：本居宣長
3. 学会等名 国立歴史民俗博物館国際シンポジウム「年号と東アジアの思想と文化」（国立歴史民俗博物館共同研究、科学研究費基盤研究（B）「年号 勅文資料の研究基盤の構築」共同主催（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 清水正之
2. 発表標題 鼎談「江戸の境涯を生きた人と書物－勝小吉『夢酔独言』から扉を開く」
3. 学会等名 国文学研究資料館・ないじえるトランスレーショントーク（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 聖学院大学ボランティア活動支援センター	4. 発行年 2023年
2. 出版社 聖学院大学出版会	5. 総ページ数 184
3. 書名 共に育つ “学生×大学×地域”	

1. 著者名 清水正之	4. 発行年 2020年
2. 出版社 九州出版社（北京）	5. 総ページ数 326
3. 書名 日本思想全史（中国語繁体字版）	

1. 著者名 水上雅晴 分担執筆（清水正之）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 八木書店	5. 総ページ数 706
3. 書名 年号と東アジア—改元の思想と文化	

1. 著者名 土方透 分担執筆（清水正之）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 聖学院大学出版会	5. 総ページ数 352
3. 書名 世界社会の宗教的コミュニケーション	

1. 著者名 清水正之	4. 発行年 2018年
2. 出版社 聯経出版（台湾・台北）	5. 総ページ数 399
3. 書名 日本思想全史（中国語・繁体字版）	

1. 著者名 清水正之 ほか3名編著	4. 発行年 2017年
2. 出版社 オリエンス宗教研究所	5. 総ページ数 307
3. 書名 『生きる意味 キリスト教への問いかけ』	

1. 著者名 加藤尚武編 清水正之 その他執筆者24名	4. 発行年 2017年
2. 出版社 未来社	5. 総ページ数 552
3. 書名 ホモ・コントリビューエンス	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>神に関係づけられる隣人愛に生きるーキリスト教大学の使命 クリスチャン新聞2020年9月27日号 https://xn--pckuay016a7c1910dfvzb.com/csdb/?page_id=1325&yn=2020</p> <p>聖学院大学教員業績 https://unipa.seigakuin-univ.ac.jp/kgResult/japanese/researchersHtml/25317/25317_Researcher.html</p>

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------